

BCS

BUILDING CONTRACTORS SOCIETY
PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

12

第三八回受賞作品（一九九七年）

愛知県豊田市立旭中学校

前編

愛知県豊田市立旭中学校。

緑豊かなこの地で今日も元気に生徒たちがこころとからだを育んでいる。

少子化による教育環境の変化

一九六〇年代以降、高度成長を背景に、日本の出生率は伸び続けた。しかし、一九七三年をピークに減少が始まり、一九九〇年代に入ると、この少子化問題は顕著になる。そして少子化の波は小中学

校の統廃合への加速と連鎖する。しかし、通学の安全、地域性などを考慮すると、統廃合はすんなりと進まないのが現実であった。実際に、統合する複数の学校のいずれを基盤とするかなど、各地で課題となっていた。そのようななか、愛知県東加茂郡旭町（現・愛知県

豊田市）もこの問題に直面していた。

旭町には、浅野中学校と旭中学校の二校があったが生徒数が減少し、塚田武士氏が旭町長に就任した一九九二年（平成四年）に、中学校を一校に統合することとなった。それぞれの学区の住民と話し合いを繰り返すが、何度やっても話はまとまらない。そこで、塚田町長は議会自身への一任をとりつけた。教育環境は子供の育成に大きな影響を及ぼすため、早急に建設地を決める必要があると考えたからである。さらに、統合するからには町の拠点となり、町の人たちが有効に使える施設にするこ

とを考え、できるだけ町の中心に計画したいという思いが町長にはあった。そこで、決着がつかない二カ所とは別の「第三の候補地」を提案し、自ら地権者との交渉に出向いた。この土地は杉本地区の南北に位置する谷と穏やかな尾根から成る約六〇、〇〇〇平方メートルの里山である。中学校までの距離や高低差などから子供たちの通学時の安全が心配されたが、スクールバスを運行させることでようやく新・旭中学校の建設地が決定した。

愛知県初「教科教室型中学校」

全ての条件が決まり、設計コンペが開催された。教育施設である

ことと同時に文化拠点としても機能する内容が求められたコンペでは、斬新かつ合理的な提案を行った中村勉総合計画事務所が選ばれた。採用にいたった最も大きな理由は、「教科教室型」の中学校を提案したことだった。

「教科教室型」とはホームルームなど学級単位の時間はホームベイスと呼ばれる場所で行われるが、授業は教科ごとに専用の教室を割り当て、そこに生徒が移動し授業を受ける形式である。それぞれの教室に、授業のねらいに応じた教材・教具があらかじめ用意され、

授業に必要な図書・資料・機器などが生徒のそばに配置されている。生徒の興味や好奇心をかきたてる環境づくりを何よりも優先した配置計画であった。

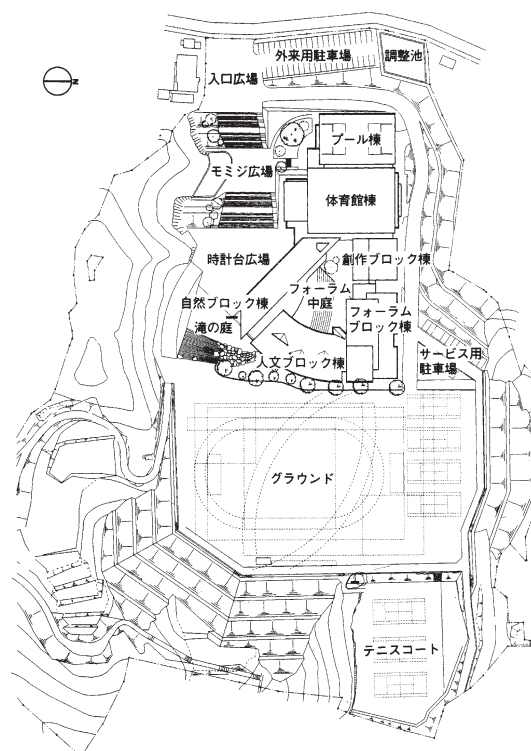
旭町では、各地の教育現場を視察すると同時に、教育に携わる専門家から話を聞き、愛知県では例がない「教科教室型」を検討していた矢先の提案であったため即決となった。

リズムと山々の緑を感じる配置計画

一方、教科教室型は不利な点も



建物の東側からの外観。ステンレスの屋根とコンクリート外壁が豊かな自然に囲まれることにより、建物の存在を際立たせる。また、内部には木材が多用され、木の温もりを感じることができる。（写真：侘美孝昭）



配置図



上／天井や壁に木材が多用されている音楽室。天井や壁には線状にカットされた木材を用いており、音響効果とデザイン性を高めた。それによって記憶に残る教室の一つになっている。下／屋根は木材によって支えられている。コンクリートの柱から、傘の骨組みのように木材が使われている。大きな柱で支えるのではなく、木材の温かさと開放性を活かした空間となっている。(写真：侘美孝昭)

記憶に残る中学校

登校してきた生徒の目の前に現れるのはまず、校舎に続く大階段である。それをのぼり切ったところには日時計の広場が広がり、エントランスの天井はこの地方で産出される杉が覆う。この一連の景色を中学校生活の記憶にとどめてもらいたい、中村氏はそう考えた。旭町が位置する三河地方は日本でも有数の杉の産地である。しか

し、杉は柔らかな材質のため、構造では使用できない。そこで、天井などの仕上げ材に使用することとした。特に、音楽室の天井は、曲面となっている部分に杉の線材が張り巡らされ、音響とデザインの両方が考慮された構造となった。「中学生の間を少しでも記憶に残る校舎で過ごしてもらいたい」そう話す塚田町長の思いは多数の町民に支えられ、中村氏の手によって実現することになったのである。

ある。生徒が移動しなければいけない点である。そこで中村氏は移動を授業から授業への切り替えのリズムとし、校舎内の移動を工夫することとした。室内にいながら間近に迫る山々を感じられるよう、大きな窓がついた階段を外側に面した場所に配置した。これにより、あたかも室外にいるかのような感

覚を覚え、次の授業までに気分転換をはかることができるのである。これは同じフロアを移動する際でも同様で、廊下を中庭が見える位置に配置するとともに、あわせて開放感のある大きな窓を採用することとした。さらに、教室に入っ

てグラウンド側が見渡すことができれば、移動による気分転換が期待できると考えたのだ。

中村氏が計画したこの景色の変化は、敷地の高低差を活かして配置された校舎ならではのものである。複雑な山間部に建てられたこの中学校の敷地は、東西に約二五〇メートルの奥行きと二四メートルの高低差がある。校舎の配置を検討する際、堆積層となっている両側の谷

を避け、上段にはグラウンド（二六メートル）、中段には中庭を中心とした四つのブロックからなる教科教室棟、下段には体育館（二二メートル）と屋外プール（八

メートル）という四メートル刻みの三段階のレベルを設定し、立体的な配置とした。この配置があったからこそ、四方の山々を校舎内から見ることが可能となったのである。

建築主より

教育施設と文化拠点の融合

元旭町長

塚田武士 Takeshi Tsukuda

私が小学六年生の時、戦時中だったため教員が不足していて、旧制中学を出たばかりの代用教員が私たちの先生となりました。その先生は、こう言ったのです。「君たちに教えることになった

とにかく学校を作らなければ、教育は成り立ちません。そう思った思いで私はいろいろと奔走しました。教科書などは知識です。社会に出たときに尊敬される人間をつくるために、いい環境の学校をつくらなければならないと思います。教科教室型のシステムは自主自立をより高めることができ、自ら学ぶということの大切さを生徒・先生ともに感じられる建物だと思います。

「君たちに教えることになった」一九五五年（昭和三十年）に愛知県旭村と岐阜県美濃村が合併して以来、何度も中学校の統合話を持ち上がったものの、移転する土地の候補が定まらず、時間がかかっていました。

設計を担当した中村氏にはこういった私の意見をはじめ、地域住民の意見や要望などを伝え、旭町住民全員の期待の高まりを感じながら建物の計画を進めていただき本当に感謝しています。

設計者より

再認識する竣工当時の理念



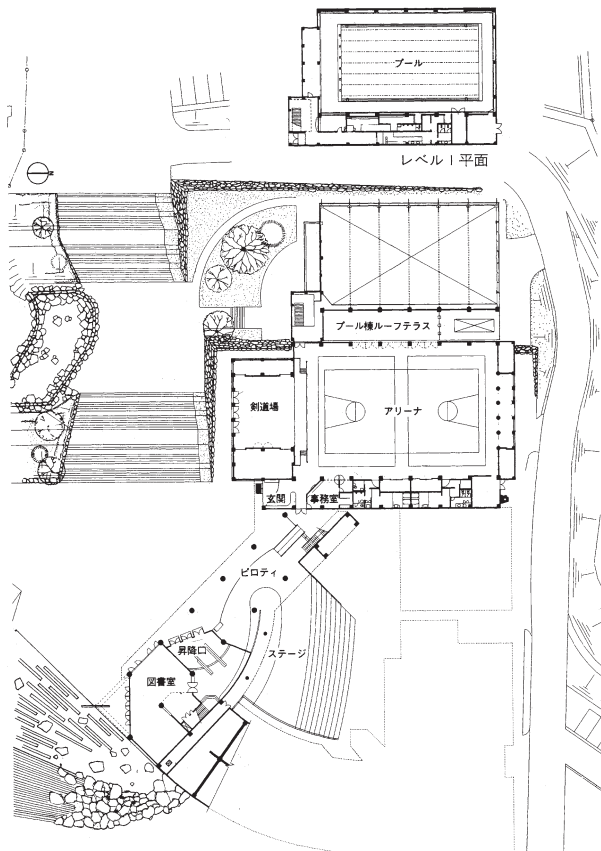
中村勉総合計画事務所代表

中村勉 Ben Nakamura

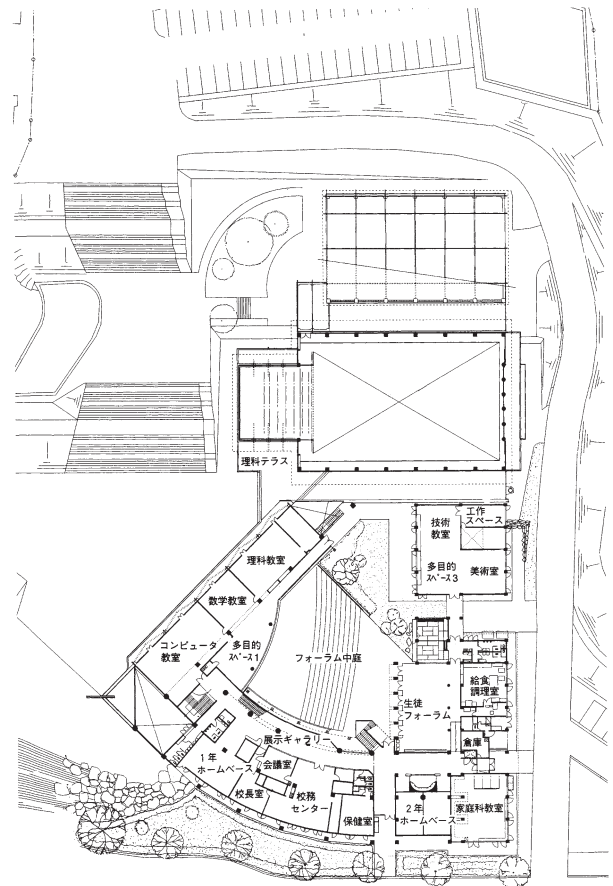
私は横文彦氏の事務所にいた一九七二年、教科教室型の小学校版ともいえるオーブンスクールという手法を日本で初めて取り入れた加藤学園暁秀初等学校（沼津市）の設計を担当しました。当初はなかなか受け入れられなかったオーブンスクールでしたが、子供たちの動きや気持ちの変化に対応した空間構成に関心が寄せられるようになり、一九九〇年くらいからは多く作られ始め、現在では三〇四、〇〇〇ぐらいあるということです。一九九〇年から長野県浪合村の村づくりをお手伝いしてい

ました。そこで小中学校の計画をしていた長澤悟先生に紹介され、旭中学校のコンペにも参加することになったのです。

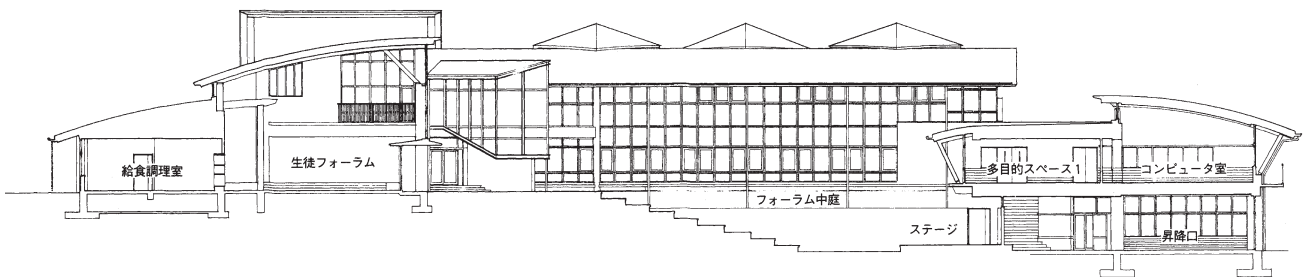
当初から言われていた谷の部分の堆積層や尾根の花崗岩部分、さらに最初に計画地を見て回ったときに気づいた最上部の断層などを考慮して全体の配置を計画しました。湿度が多く、湧水が流れる周りの環境を把握することと断層部から出てきた岩を半分に割り石垣に利用することが計画に盛り込まれたことで、コストの折り合いもつけることができました。また、あたたかみのある木製サッシでできているサッシや、ピン構造で屋根を支える斜めの木材でつくった柱などは、地域の文化拠点にふさわしいつくりにできましたし、森林組合からご提供いただいた杉材をエントランスや音楽室の天井などにも使用することができ、地域とのつながりを表現できたと思っています。



平面図 (レベル2)



平面図 (レベル3)



立面図

愛知県豊田市立旭中学校

カ石インターチェンジより車で30分



工事概要

所在地：愛知県豊田市杉本町羽根1-1
 建築主：愛知県東加茂郡旭町
 設計者：株式会社中村勉総合計画事務所
 施工者：前田建設工業株式会社
 竣工：平成8年3月1日
 敷地面積：60,013㎡
 建築面積：5,101.849㎡
 延床面積：5,862.817㎡
 構造規模：RC造、木造、地上2階

